誌上行学講習会

高佐日煌上人

第四課　十界の社会観

「第四課　十界の社会観」

今までは四徳波羅密多（しとくはらみった）についてお話し申しましたが、要するに人類全体の為の文化は除々に理想化に向けて進んでおるが、事個人に関するとどうもはっきり解決を与えていない。いわゆる途中であります。どうすれば我々が現在生命のある内に、此の究竟（くぎょう）の目的が成就出来るかという問題になっているのであります。

死なない生命をみつける。無苦安楽の生活をしたい。あくまでも自主自由でありたい。清浄平安な楽土に住みたい。此の四つの究竟目的（くぎようもくてき）の他に人生の幸福は絶対に無いのであります。徳川時代にはやりました歌に「いつも月夜で米のめし、おまえ十八、わしや二十、へらぬお金が二十両、ションガイナ」とあります。この「いつも月夜で米のめし」というのは、いつも理想的で住みよい世の中を言っている。常に光々と清い月あかりがあり、おいしいお米のごはんが食べられる。当時のお百姓さんは自からは麦を食べお米は売って金に代えていましたら、お米を食べるというのはたしかに理想であったに違いありません。経済が豊かにならなければ食べられない米、ですから清い美しい月光のもとで、キラキラひかるおいしいごはんを食べられるよう願ったのであります。実際この歌は人間の究竟目的を言い得て妙であります。いつの場合も人の願うものは同じであるということの証拠でもありましょう。

「ションガイナションガイナ」というのは、自由を願っているが叶えられない、しょうがないなしょうがないなという意味ですが、逆に言えば常に自由がほしい自由がほしいという訳であります。

「おまえ十八、わしや二十」というのは、おまえはいつまでも十八才、私しは二十才、これ以上年をとらない、即ち永遠の若さを生きることへの理想を含んでおります。これは即ち死なない生命を願っていることであります。「へらぬお金が二十両」というのは、つかっても決して二十両以下にならないという、経済の絶対なる安定性を言ったものであります。例を出して考えてみましょう。最近浅草の観音さまが約七億円かけて旧態に復元いたしましたが、以前の観音さまは三代将軍家光公が建てたのでありますが、米一石一両の時、一万石で建立されたのであります。七堂伽藍一揃って一万両で出来上ったものが、只今は観音堂一つだけで七億円かかっております。これをみても当時の二十両がどの位の額かがわかるとおもいます。

泥棒にしても十両以上盗むと、理由の如何にかかわらず打首ということになっておりました。ですから使っても決してへらないというのは、素晴らしい経済の安定を意味していることになります。

以下次号に続く